

2003年度「進路ガイダンス」検証

倉石 文雄

(美術教育講座)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

Verification of the "Courseguidance" in the Year 2003

Humio Kuraishi

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要 旨 2003年度の進路ガイダンスに関する概要と経過報告とそれらを経てコース・領域に振り分けされた直後の学生に対するアンケート調査の検証である。

キーワード 進路ガイダンス 学校教育入門 コース・領域振り分け GPA

1 はじめに

平成15年度の進路ガイダンスの責任者として、その責務を終えることができたが、これもひとえにチームとして共に作業に当たった、田中(吉)委員・小西委員や各クラス担任の先生方のご協力、さらにGPA計算での学務方の御苦勞の賜物である。まず最初にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

さて、平成15年度は実験的ではあるが、ガイダンス担当者が学校教育教員養成課程の主任を兼任するというシステムが導入されたことから、例年とは異なる学生からの意見を集約することができた、報告スペースに限りがあることから、詳細な報告には限界があるが、これらの経験を整理し、今後の進路ガイダンス、コース・領域振り分け、さらには、これからの教育学部のカリキュラム改善のための意味ある報告になれば、と考えている。

2 進路ガイダンス

作業概要

平成15年度の学校教育入門におけるガイダンス(コース・領域決定作業)は、その行事などの実施時期や資料の配付時期などから、学生・教官とも、主に後期(10月)から本学的な作業が始まるように認識されてきているが、実際は最初の1年生に対する課程別ガイダンスから、まさに本番の振り分け作業が始まるといってよいものだった。前年度(平成14年度)の委員から引継が終了した直後(14年度の3月中旬)から、倉石(責任者)・田中(吉)(データ整理)・小西(資料制作)の担当委員によって、前年度の振り分け作業の俯瞰作業による全体像の把握・検討課題の重要度による順位付け・振り分け作業の基本方針の作成等、短期間のうちに詰めを行い、新年度(平成15年度)早々には、ある程度基本的な方向性を定め、学生に振り分けの方針と基本行程をクラス担任及び学生に提示できる準備が必要であった。ゆえに、平成15年度4月14日(月)の「第1回学校教育入門ガイ

ダンス」が「進路ガイダンス」1年の全体の流れを俯瞰した際の一つの大きな山であった。

10月からの後期ガイダンスは、月1回のペースで実施された。前期で方向付けられた振り分け方針を、全体・クラス単位で、学生・担任とも何度も確認し、共通認識を持たせながら進めた。「コース選択に関する予備希望調査」は2回実施し、データを収集。結果が出るたびに学生に情報をオープンにし、必要に応じて学生と担任の先生方との個人面談を実施した。例年のガイダンス作業と比較して特に異なる点は学生の成績(GPA)を2種類学生に提示したことである。1つ目は成績(GPA)を度数分布形式にし、各コース・領域のボーダーが分かるようにしたもの、もう一つは全ての学生個人の成績(GPA)を出し、一覧にした物である。うち、学生個人の成績(GPA)一覧は、担任が管理し、学生の希望に応じて、自身の成績(GPA)を周知した。それらをふまえ1月14日(水)に本番となる「コース希望に関する希望調査」を実施した。

コース・領域の振り分け作業の重要な材料である成績(GPA)は、予備調査では担当教官のみの集計で行ったが、「コース選択に関する希望調査」は、事務方にも作業をお願いし、二つの集計を用いて万全を期した。

「コース選択に関する希望調査」の集計の結果は、資料2をご覧いただければ分かるとおり、表面的には大きな問題はなかった。この結果をふまえ、第2・第3希望・それ以外の希望となった学生には、学生の希望に応じ、個人的に面接を行ったが、連絡が付かなくなった学生、休学を希望する学生が発生したことから、ガイダンス担当者及び、クラス担任が調整に入った。これらのことから考えて、実際の振り分け作業は、後期に本格化することは確かであっても、学生には、早い段階から、なるべく多く、正確で公平な情報を与える必要があると考える。例えば、ガイダンス資料(コース・領域紹介コーナーを含む)は、ガイダンス担当教官が、夏期休業中に制作し10月の第1回後期ガイダンスで配布するが、後期に配布するより、前期の適当な期日に配布する方が適当と考える。また成績(GPA)

各コース・領域の希望数など、振り分け作業のなかで発生する情報は、なるべく早く学生に周知したいところである。コース・領域選択において、正確な情報を少しでも早く多く提供することで、学生の選択に関する精度を引き上げ、それに伴う不安を少なく留めることに貢献できると考えたからである。

3 コース・領域の決定に関するアンケート

3.1 アンケートの実施の動機

アンケートを実施した動機だが、これまでコース・領域分けの報告は、関係委員長より年度初めに前年度の領域分けの報告がされてきた。概要と経過、さらに95%以上の学生が第一希望で振り分けられたという程度の報告が毎年されている。筆者は、これまで、この件について積極的な役割を経験したことがなかったことから、これらの報告には疑問を持つことは無かった。しかし、平成15年度のコース・領域分けの担当者となり、実際の振り分け作業を行ったこと、さらに学校教育教員養成課程主任を兼任し、学生自治会SUNとの意見交換を通じ、学生からの広範囲の意見が聞ける立場に立ったこと等から、これまでの筆者の認識とその実体が少し食い違っているように感じたことが、コース・領域振り分け作業終了後の新2年生にアンケートを実施することになった発端である。

3.2 アンケートについて

アンケート記入時間は、領域別ガイダンス等の時間との関係から、長くとも10分程度で済むことが必要であり、設問・理由記入量とも多くは設定出来ないことから設問3問、50字程度の理由記入箇所3カ所程度を目安として考えた。それが、資料1である。

3.3 アンケートの結果

1. コース領域分けガイダンスの内容が理解できたか(130名回答)

よく分かった(21名)・だいたい分かった(31名)普通(68名)ややわかりづらかった(10

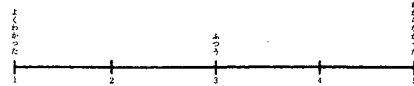
■資料1

■平成15年度のコース・領域選択に関するアンケート

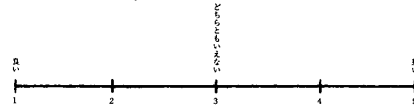
平成16年4月8日（木）
ガイダンス担当 倉石

1.1年次コース・領域分けガイダンスについて

①コース・領域分けの方法や進め方などは理解できましたか？



②1年次コース・領域分けの方法で、成績（GPA）をもちいました。
このことに対するお考えをお聞かせください



■理由をお書きください

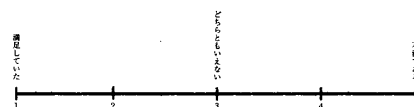
2. コース・領域分けの結果について

①あなたはどの希望のコース・領域になりましたか？

該当する場所を○で囲んでください。

●第一希望 ●第二希望 ●第三希望 ●以外

②コース・領域分けの結果に満足していますか？



■理由をお書きください

■コース・領域の振り分けに関して、ご意見・ご感想などお聞かせください。

名)・分からなかった (0名)

2. 成績 (GPA) をコース・領域振り分けに使用したことについての感想 (130名回答)

良い (12名)・まあまあ良い (28名)・どちらとも言えない (57名)・あまり良くない (22名)・悪い (11名)

■代表的な理由

良い [公平である。わかり易い。がんばった人が希望をかなえられて当然。進路決めに役にたった。]

どちらでもない [推薦入試だから関係ない。計算 (GPA) が難しい。]

悪い [先生で成績の基準が違うから公平でない。計算 GPA 算出が難しい。入ってからの「やる気」の方が大事。病気で授業に出られない学生に不利になった。]

3. あなたは、どの希望コース・領域になりましたか (128名回答)

第一希望 (108名)・第二希望 (17名)・第三希望 (2名)・その他 (1名)

4. コース・領域分けの結果に満足していますか (130名回答)

満足している (71名)・まあまあ満足している (20名)・どちらとも言えない (28名)・不満で

■資料2、平成15年度 コース・領域分けに関する志望調べ、人数変遷表

	希望的人数	受け入れ可能数	推薦入試の数	4月14日 第1回調べ	10月8日 第2回調べ	1月23日 第4回調べ	最終結果 (進学率・推薦入試を含む)
教育学	10	13		15	24	15	13
心理学	10	13		10	7	16	12
幼児教育	10	12	3	22	20	16	12
障害児	15	20	4	7	7	10	18
国語	12	16	2	16	14	14	16
社会	12	16	-	11	8	12	14
数学	12	16	2	17	16	17	16
理科	12	16	0	9	9	8	9
音楽	7	9	3	10	9	9	9
美術	7	9	3	6	5	4	6
保健体育	7	9	2	8	9	9	9
技術	4	5	2	2	2	2	2
家庭	7	9	2	3	5	8	9
英語	5	7	-	16	16	9	7
未提出者					1	2	
その他			※14			1	
合計	130	170		152	152	152	152

■※14名は「小学校教育に関心をもつ者」で推薦入学した者の数
■第3回調べは、データ不足のため省略

ある（6名）

■代表的な理由

□満足 [第一希望になったから。推薦入試だから。]

□どちらともいえない [推薦入試だから関係ない。しかたがない。入りたい領域を最後まで迷ったから。]

□不満 [第一希望にならなかったから。受け入れ上限の決め方がコース・領域でまちまちなように思えた。]

■全体を通しての意見・感想

○希望の領域に行けないと大学に入った意味がない。○コース・領域の、もっと詳しい説明を聞ける機会がほしい。○最初（入学時）からコース・領域を決めてほしい。○全員希望の領域・コースに行けたほうがよい。○希望のコース・領域に行けないと、どこにも書いていない。○上限に融通をきかせて欲しい。○入学時にちゃんと理解させてほしかった。○最後まで、自分に合うコース・領域がつかめなかった。○コース・領域ごとに試験（論文・面接）を行って決めてはどうでしょうか？○まだ、コース・領域で勉強が始まったわけではないので満足か

どうかは分からない。○調査結果が、集計のたびに公表してもらえたので参考になりました。○もともとすこしの枠しかないのに、そこに入れようとするのは無理があるのではないか？

3. 4 アンケート結果の検証

これまでの認識と異なる内容を含んでいるものとしては、満足、まあまあ満足を含めると130名中91名ということであり、全体の70%ということになった。これはこれまでのこの件に関する報告から考慮すると、満足度に関しては予想を下回る結果だった。関連して問題なのが、第一希望の学生は108名だが、満足、まあまあ満足の学生が91名ということから、第一希望が叶いながらも、満足していない学生が相当数いるということが分かる。つまり、本来は第一希望ではないが、成績（GPA）等を考慮し、自分で調整してほかのコース・領域に回った、ということだと考えられる。全体の70%が満足・まあまあ満足である、ということだけを考えれば、大きな問題もないように思えるがこのアンケートでは小学校教育に関心を持つもので推薦入学したものを除く、23名の推薦入学者の適当な処

■資料3、コース・領域の決定状況（平成10年～15年）

	標準的な 人数	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15
教育学	10	15	16	21	16	13	13
心理学	10	14	16	12	11	10	12
幼児教育	10	10	18	13	12	12	12
障害児	15	15	⑩	⑨	22	17	18
国語	12	14	14	14	⑪	14	16
社会	12	13	⑪	⑩	16	16	14
数学	12	15	20	16	14	17	16
理科	12	16	⑩	⑦	⑦	⑩	⑨
音楽	7	8	9	10	⑤	⑥	9
美術	7	②	③	⑤	7	⑤	⑥
保健体育	7	9	8	9	9	7	9
技術	4	①	①	②	①	③	②
家庭	7	④	③	7	⑥	9	9
英語	5	8	6	7	7	6	7
合計	130	144	142	142	144	145	152

○は標準人数を下回ったコース・領域の人数

置が行われていないことから、23名の学生が不満・やや不満の項目を選択しない、という前提で考えたとしても、一般入試で入学した学生の満足・まあまあ満足の割合はさらに下がるということを指摘しなくてはならないし、感想・意見から分かることだが、満足であるという学生より、不満であるという学生の意見が強く、切迫感を感じざるを得ないところである。

3. 5 アンケート調査（資料1）と資料2・資料3を合わせた検証

まず、資料2からだだが、平成15年度の志望の変遷表である。特定の領域以外は、4月の最初の希望調査から、本質的には、ほとんど動きが無いことが分かる。この結果は、2003年度「学校教育入門」の反省的考察における高木由美子教員の調査結果を実証する結果となっている。4月の希望調査では幼児教育と英語教育の希望者が突出していたが、その後の調整作業から幼児教育希望の学生は、幼稚園免許のとれる、あるいは、幼児教育の内容を含んだコース・領域を希望して移っていき、英語教育の希望の学生も、同様に、英語関係免許がとれるコース・領

域へ移って行く傾向が顕著であった。この傾向に関しては、クラス担任による個別のガイダンスにより把握されている。また、このような傾向は、今年に限ったことではなく例年同様の傾向を示している。そしてここで、問題を複雑にしているのがこの2つの領域を志望する学生の成績（GPA）が極めて高い傾向にあることである。これらの学生が、他のコース・領域を志望すると、すでに満杯状態のコース・領域の学生集団に割って入り込むことになり、移動先の成績下位の学生をそのコース・領域から押し出すことになった。押し出された学生の動揺は想像するにたたくない。

次に資料3である。これは、平成10年度から15年度までのコース・領域の決定状況である。○で囲んだところが、標準となる学生数を下回ったところであり、6年間で8コース・領域が標準となる学生数を下回る結果を経験していることが分かる。標準となる人数を下回るとは、極端な場合、学習活動の低迷化を発生させるし、コース・領域の存在意義を問われかねない問題でもある。大学が法人化された現下で定員割れともとれる現象は、どこからどう見ても

良いはずがない。これは、現在の教育体制下における、コース・領域を運営する教員の一つのストレスであると言えるだろう。

一方領域分けの結果と、学生の反応に意識を転じてみると、募集要項には、希望のコース・領域に進めないとは書いておらず、希望のコース・領域に進めない可能性がある、という事実は入学後に知らされることである。そのようなガイダンスを受ける前の学生は、自分が進みたいコース・領域で学ぶことが前提となって。大学生活を考えていることは当然であるが、その後そうならないかもしれない可能性を突如知らされるということになる。

コース・領域の振り分け作業と、課程主任という仕事を1年間体験して感じたことは、振り分け結果における数字以上の学生の不安感である。資料3の結果は、振り分け作業で発生する学生の不平不満の代償として考えることもできる。その代償として現れる、各コース・領域の学生数の充足度(標準となる人数に対する比較)は、過去6年間で14コース・領域中、8コース・領域が標準学生数を割り込むという結果となっている。改組前には、どのコース・領域も標準人数を割り込むということはなかっただけに、この点に関しては残念ながら組織が、うまく機能しているとは言い難い状況といえ、抜本的な改善・改革が必要な時期と考える。

最後に現在、進路ガイダンスと学校教育入門は、前期が学校教育入門、後期が進路ガイダンスということで、運営する委員も重複している。前期を中心として行われる学校教育入門では、新入生に対して効果的な内容があることは明らかであり、その点に関しての検証は、ここでは紙面を割かない。しかし進路ガイダンスに関しては、学校教育入門と同じ委員で行っていても内容的にはかなり異なるものである。また現在は後期に重点が置かれた実施体制だが、先に述べたように、それは前期に行って良い内容と考える。そのようなことから、この二つの内容の実施形態としては、現行の実施形態は相応しいとは思えない。

4 まとめ

平成15年度の進路ガイダンスに係わり感じたことは、現行の体制に対する学生の不満の大きさと切実さである。特にコース・領域希望に関して、志望度の極めて強い学生の希望が叶わず、他の領域に移った場合、その後の修学の意味を失う可能性がある。現状ではそのような学生に対して、移動先のコース・領域の教員に対して手当に万全を期すことをお願いするしかない、ということだが、このようなことでは抜本的に問題解決しないことは言うまでもない。コース・領域振り分けには、現行の課程一括指導教育体制下の問題点が集約されている側面がある。このような教育体制となってから、すでに完成年度は過ぎており、学部を目指す方向性や入試方法含めた抜本的な改革が必要であることは否定できない状況となっている。

参考文献

長谷川順一・小方朋子・田上哲, 「2002年度「学校教育入門」の授業評価」香川大学教育実践総合研究 2003, No.7